

9.11から 四半世紀

置き去りにされた 元収容者の人権

舟越 美夏

2001年9月11日に起きた米同時多発テロから25年がたった。ニューヨークの世界貿易センタービルが崩壊する映像は衝撃的な記憶として今も脳裏に刻まれているのではないだろうか。9・11を受けて米国は「対テロ戦争」の名の下にアフガニスタンとイラクに侵攻。テロの容疑で人々を拘束し、グアンタナモ収容所に連行した。無実の市民や戦地に赴いた米兵たちのトラウマはなおざりにされたままだ。「対テロ戦争」の結果は、米軍の後方支援強化を進める日本に重い問いを突きつける。米軍への加担は何をもたらすのか――。

キューバ南東部グアンタナモ。米国が120年以上前、キューバの独立運動に介入し永久租借権を獲得したこの地に、米海軍基地がある。

9・11から4カ月後、約116平方キロメートルの基地の一角にテロ容疑者収容所が設置された。

9・11の発生直後から米国は、中東やその周辺で子どもや女性を含む数千人を拘束し、各地の米中央情報局(CIA)の秘密収容所に連行した。とりわけアフガニスタンとパキスタンでは、多数の住民が米国に引き渡された。「国際テロ組織」アルカイダや(イスラム主義組織)タリバンの関係者を通報すれば高額の報奨金を出す」とする米国のビラで、報奨金目当ての通報が相次いだのだ。

グアンタナモ収容所には、そうした人々のうち少年を含む約780人の男性が移送された。

「収容者は最低最悪の人間たち」で「非常に危険な不法敵性戦闘員」だから、捕虜の人権や尊厳を守るジュ

「対テロ戦争」が残した
負の遺産グアンタナモ

鉄条網に囲まれた米軍のグアンタナモ収容所の塙と監視塔。
2012年1月19日、キューバで。(提供/AFP・アフロ)



ジャーナリストで元収容者のサミ・アル＝ハジさん。

ネーブ条約には該当しない——。ジョージ・ブッシュ大統領（当時）ら米政権トップは、そう言い切った。

実際には多くの収容者が、普通の市民だった。タクシードライバーや人道支援者、料理人、ジャーナリスト、大学進学を目指していた18歳、混乱の中にいた15歳以下の少年もいた。司法手続きがなく、終わりが見えない拘束の日々。日常的な拷問と虐待。グアンタナモ収容所では9人が自殺により死亡したとされ、アフガニスタンやイラクのCIAの施設では、拷問や虐待で複数が死亡したと明らかになっている。

「対テロ戦争の負の遺産」と批判されたグアンタナモ収容所には今もイエメン人ら15人が拘束されている。9・11に関係したとして有罪判決を

受けた者は、これまでのところ一人もない。

空爆下の村で見た惨状

オーストリア第二の都市グラーツ。今年6月初旬、グラーツ大学で「収容所会議2026」（注）と題した国際会議が4日間にわたり開かれた。集まったのは社会学や歴史学、政治学などの研究者や学生ら、42の国と地域から数百人。主役の特別登壇者は、7人のグアンタナモ収容所の元収容者である。うち4人は、十数年から20年余りも拘束された。

ジャーナリストのサミ・アル＝ハジ（57歳）は、スーダン出身。中東の衛星テレビ、アルジャジーラのカメラマンだった。

米国がアフガニスタン空爆を開始した2001年10月、サミはアフガン南部にいた。アルジャジーラはタリバンの支配地域に留まり、空爆される側から伝え続けた唯一の外国メディアである。

爆撃されていたのは市民だった。壊滅した村。病院でケガの手当てを受ける子どもたち。運転手ごと火に

包まれるトラック。ロケット弾できた巨大なクレーターで、村人が家族の遺体を捜していた。

難民キャンプで、授乳しながら泥水で洗濯をする若い女性がいた。側には焼けこげた聖典コーランと赤い布の包みがある。女性の夫と父、兄弟とその家族の遺灰が納められていた。村が空爆され、女性と子ども、彼女の母だけが生き残ったのだ。女性性は、村が「アフガニスタン」と呼ばれる国に属することも、米国が「対テロ戦争」を始めたことも知らなかった。対テロ戦争を支持していた人たちには想像できない隔絶された社会で、人々は日々を営んでいた。世界の平和と人権、民主主義を守るためとして始まった戦争が、実は誰を攻撃しているのかを伝えたい。サミは、時にはタリバンに拘束されながらも、カメラを回し続けた。

一方、アルジャジーラのカブール支局は、アルカイダの最高指導者ウサマ・ビンラディンの独占インタビューや声明を報じていた。米CNNテレビが頻繁に引用し、米政府はアルジャジーラを強く非難していた。

タリバンが敗走を始める11月13日、米軍はカブール支局が入居する建物を空爆した。「アルカイダの拠点と確認した」からだ、米中央軍は発表している。幸い、支局長らは直前に支局を出て無事だった。ジャーナリスト保護委員会（CPJ）、本部ニューヨーク）は声明を出し、報道機関への攻撃に深い憂慮を表明した。

アルジャジーラはアフガン報道をやめなかった。タリバン政権崩壊でサミはいったん、パキスタンに出たが、本社からの指示で、アフガン南部に向かうことになった。01年12月末、パキスタンのチャマン国境検問所には、各国の報道機関が押し寄せていた。

報道カメラマンも拘束

サミは、ここでパキスタン当局に拘束された。理由は不明なまま解放されず、3週間後の02年1月8日、手枷足枷に黒頭巾を被せられ、アフガン東部にあるバグラム米空軍基地のCIAの秘密収容所に米軍機で送された。さらに2週間後、南部カンドハルの収容所に移った。

収容所では同じ尋問が繰り返された。「ウサマ・ビンラディンを撮影し

（注）収容所会議（Camps Conference）：米国自治領プエルトリコのプエルトリコ大学とオーストリアのグラーツ大学が共催。2年ごとにグラーツで開かれ、文系研究者や芸術家、人権活動家らが集まる。

タクシードライバーや料理人、少年……多くは普通の市民だった

元収容者のモアザム・ベッグさん。

たのか」「アルジャジーラはビンラディンから資金提供を受けているのか」。否定すると殴られた。グアンタナモ収容所に移送されたのは「米軍の情報提供者になれ」と言われ、拒否した後だった。国境での拘束から半年。家族もアルジャジーラも、サミの行方を懸命に捜していた。

「収容所の米兵の大半は米国しか知らず、未知の世界に恐怖を抱いていた」とパキスタン系英国人のモアザム・ベッグ（58歳）は言う。

大干ばつに苦しむアフガニスタンで井戸掘りをしていたモアザムは、タリバン政権崩壊後にパキスタンの

首都イスラマバードの自宅に戻った。02年2月、パキスタン当局に自宅で拘束され、米軍に引き渡された。

「収容者は世界で最も危険で、隙をついて襲いかかってくる」。そう教え込まれていた米兵は、強い敵意と警戒心を向けてきた。

「米兵たちはハリウッド映画を通じて世界を理解し、頭の中でフィクションの世界を作り上げていた」。モアザムは、ユーモアを交えながら、真顔で語る。

「軍事専門家」とあだ名された収容者は、自国のサウジアラビアで警備隊に1年間、所属しただけ。モアザムは「暗殺者」とされ、サミは「アルジャジーラで軍と諜報機関のために仕事をしていた」と噂された。「収容者は、米軍輸送機の油圧ホースを噛み切って墜落させかねない連中だ」というマイヤーズ米軍統合参謀

本部議長（当時）の発言もハリウッド映画調である。

今でこそ笑えるが、モアザムも当時は絶望的だったはずだ。「ひとたび収容所に入れられれば、どうすることもできなかった」からだ。裁判はなく、拘束はいつまで続くのか分からない。拷問や虐待から逃れられる者はいなかった。イスラム教の礼拝が禁じられ、聖典コーランが冒瀆された。精神に異常を来した者、自殺を試みる者も少なくなかった。

米連邦最高裁は04年、弁護士の見を認めたものの、環境改善は進まなかった。

ハンストが唯一の抗議

唯一の抗議方法は、ハンガーストライキだった。05年12月、80人以上が行なったハンストは、弁護士らを通じて外部に伝わり、欧米のメデイ

アが報道した。苦しいハンストは、最強の武器だった。

アルジェリア出身のアブドゥルラティフ・ナセル（61歳）は、拘束中に英語の勉強を続けた研究者タイプ。当初は、ハンストに反対だったが、効果的な抗議方法はほかにない、と参加した。

処遇改善、収容者3人の死が「自殺」とされたことへの抗議……。100人前後が参加するハンストが何度か起きた。収容所は、強制摂食でハンストをやめさせようとした。

「拷問そのものだった」とアブドゥルラティフは顔をしかめる。「拘束椅子」に縛り付け、鼻からチューブを入れ栄養剤を流し込む。鼻や喉に強烈な痛みが起き、嘔吐を催し、時には栄養剤が肺に入った。世界医師会や国連から強い非難が上がった。

アルジェリア出身のラハダル・ボウメディーン（60歳）は、イスラム圏の国際赤十字「赤新月社」に所属し、ボスニア・ヘルツェゴビナで人道支援活動をしていた。9・11後に、「米大使館の爆破を企てた」という身に覚えのない容疑で拘束された。

グアンタナモ収容所では「拘束されている理由を教えよ」と要求し続

米軍のグアンタナモ収容所。
2016年3月22日、キューバで。
（提供／ロイター・アフロ）

元収容者のアブドゥラティフ・ナセルさん(右手前)と、
手首に残る手錠の痕を見せるラハダル・ボウメディーンさん。



「米兵たちはハリウッド映画を通じて世界を理解している」

待っていた妻子としばらくの間、無言で固く抱き合ったという。「信仰と家族への思いだけが支えた」。手首には、7年間の手錠の痕が残っている。

サミもハンストに参加した。「私はグアンタナモにいる唯一のジャーナリスト。すべてを観察して記憶し、後に伝える」。その気概が苦しい日々を支えた。グアンタナモでの拘束を知ったアルジャジーラも、サミの解放キャンペーンを繰り広げたが、日々は過ぎていった。

08年5月に解放されるまでの約450日、サミはハンストを続けた。解放前、米国側は「あなたは今も我々の敵だ」と宣言し、「ジャーナリズムに戻らないと誓う文書」に署名す

るよう求めた。サミは拒否した。

拘束時と同じきつい拘束具をされたまま、米軍機での三十数時間の輸送は、ハンストで体力が落ちていた彼には拷問だった。スーダンのハルツーム空港に到着した米軍機から、両手を拘束されたまま搬出されるサミをアルジャジーラは記録している。「病院のベッドで妻と息子の姿を見た時、生き返った気持ちだったよ」。サミはアルジャジーラに戻り、ジャーナリスト保護や人権の問題を担当している。

解放後も続く苦難の道

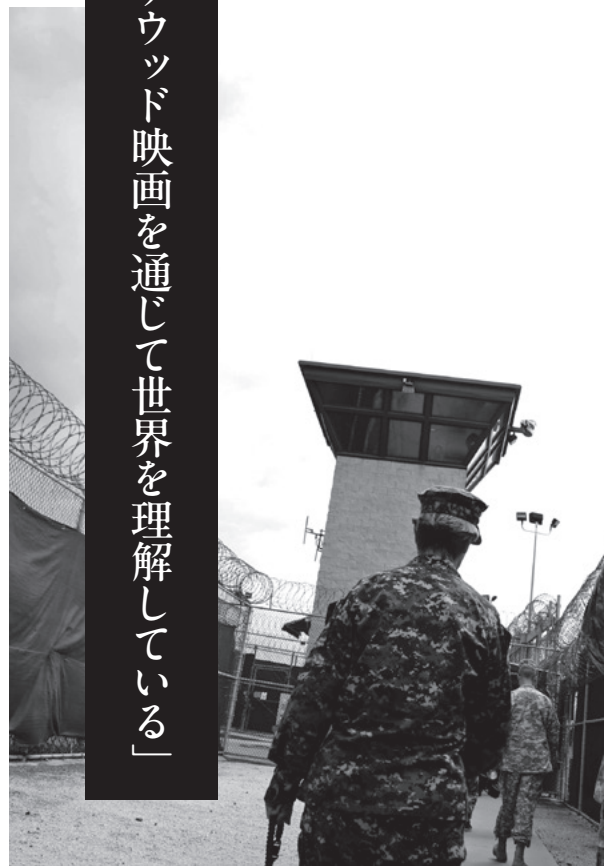
解放される収容者がどの国に住むかは、米国が決めた。母国で解放され、家族と再会した者は幸運だっ

た。サウジアラビアでは、刑務所に入れられた者もいた。出身国が政情不安定な場合は、米国務省が「再定住国」を仲介し、ウルグアイなど60カ国以上が検討された。

解放されても、苦難は続いた。米国から補償や謝罪はなく、拘束時に没収された身分証明書やパスポートは返却されなかった。生きていく上で必要な書類がないのだ。拷問や長期拘束で、誰もが心身に病を抱え治療が必要だったが、政府からの支援はなきに等しかった。

携帯電話を通じて会議に参加したイエメン出身の男性は、数人の同胞とカザフスタンに移送され、政府の厳しい監視下に置かれた。言葉ができず、収入の術もなく、病気の治療も受けられない。家族とは遠く離れている。絶望して自殺した人もいた。

22年に解放されたアルジェリア人のスファイアン・バーフーミ(53歳)は、自国に移送され母と再会した。しかし「グアンタナモに20年いた」と偏見の目で見られ、職につけない。結婚は叶わぬ夢だ。「病気の母の世話をしながらどう生きていけばいいのか」。ビデオ通話で、出口が見えない苦境を訴えた。



9.11から
四半世紀

元米将校が見た収容所の「狂気」

グアンタナモ収容所で防諜活動を担当した米兵の中にも、非人道的な収容者の扱いに衝撃を受け、真実を広く社会に知らせなければいけないと考えた人がいた。

「彼は勇気の人だ」。「収容所会議2026」で元収容者のモハメド・ウルド・スラヒ（56歳）が紹介したのが、米軍退役将校、ジョージ・マクマスターズ（69歳）である。

米国東部出身。高校卒業後の1976年、海兵隊に入隊した。10年後に将校として退役した後は、ハーバード大学などで水泳や水難救助の指導に打ち込み、自身もオープンウォ

ータースイミングの国際大会に出場した。大会に招待されたエジプトで、判事や軍関係者、映画スターらと交流し、豊かな文化を知った。

9・11で軍に戻る決心をした。「愛国心が燃え上がった」からだ。米国防務省（USO）によると、9・11後の1年間で「愛国心」などを理由に、18万人余りが現役兵として軍に入隊している。

だが、彼は当時45歳。海兵隊には年齢を理由に断られたが、陸軍に兵卒として受け入れられ、2003年9月、グアンタナモ収容所に派遣された。

最初の任務は、収容所の周辺警備だった。米政権トップは「アルカイダが収容者の奪還に来るのではと恐れていた」ためという。

数カ月後、収容所内の新聞『The Wire』で、マクマスターズについての記事が掲載されると、防諜部隊から「彼が欲しい」と上司に連絡が来

た。ハーバード大学でアラビア語を学んだこと、元海兵隊将校であることが買われたらしかった。

グアンタナモ収容所は、重警備房や懲罰房、15歳以下の房など少なくとも七つの区画に分かれていた。一般の兵士は、任務として命じられた場所にしか立ち入りできず、収容者との会話は、基本的に禁じられていた。しかし、防諜担当は所内を歩き回り、収容者と話ができた。

中東の文化と歴史の深さを知るマクマスターズには、個人的な関心があった。「米国が拘束したのはどんな人たちか」にである。

「アッサラーム・アレイクム」あなたに平安あれ」の意。房に入り、アラビア語で挨拶をする。相手が目を合わせると会話を始めた。母語はさまざまだったが、初歩的な英語ができる者は少なからずいた。

敬意を持って接する彼に、収容者は徐々に心を開いた。生い立ちや家

族、健康状態などを胸ポケットに入れているノートに書き留め、報告書に書いた。

「拷問せずに、なぜこんな情報が得られるのか」。CIA職員が、報告書を読んで言ったという。

崩れ去った国の理想像

数百人の収容者と話したマクマスターズには確信があった。大半はテロとは関係がない無実の市民だ。そんな人々を、CIAと米軍は動物のように扱っていた。

収容所は、人間性を碎き、抵抗の意志を折るよう設計されていた。小さな檻や窓がない房。消灯されない照明。懲罰房は窓にアクリル樹脂がはめ込まれ、室温は40度を超えていた。床や壁に鎖でつながれた男たちも見た。時折、建物から悲鳴が響いた。懲罰房で、首吊りに遭遇したこともあった。

狂気だ。これは自分が知る米国で

元収容者のモハメド・ウルド・スラヒさん(左)と
元米軍将校のジョージ・マクマスターズさん。





「大半は無実の市民。国際条約違反の実態を伝えなければ」

はない、と思った。信じていた国と理想が、崩れ去った気がした。

尋問官は「強化尋問」と呼ぶ拷問で望む言葉を収容者から得ていたが、それが米国を守ることにつながらないのは明らかだった。「国際条約違反のこの実態を市民に伝えなければ、私も加担したことになる」。そう思った。

任期が終わるまでの半年近い日々、収容所をくまなく歩き、得た情報をノートに書き留めた。04年7月に任期が終わる前、ノートを荷物に紛れ込ませて米国東部の自宅に送った。

「対テロ戦争」の真実を知らせたい。本の執筆を決意したのは、米国の主導で03年に始まったイラク戦争だった。侵攻の理由である「大量破壊兵器」は見つからず、フセイン政権は崩壊。警察や軍の解体で治安が悪化

し、激しい内戦となった。過激派組織ISが台頭し、自爆テロが頻発。多数の民間人が巻き添えになった。

「戦略的思考なしに行なわれた不当な戦争だった」。マクマスターズ自身は、05年ごろに1年間派兵され、言いしれぬ戦争の残酷性を体験し、「犠牲になるのは市民」という現実を痛感した。

中でも中部ラマディでの市街戦は、深いトラウマを残した。小さな運河を挟んで武装勢力と米軍との銃撃戦が始まった時のことだ。民家の扉が開き、2人の子どもが押し出された。背後にいるのは、武装勢力か、母親か。「射撃やめ」と無線で味方に伝えたが、銃撃戦は止まらなかった。事態が静まってから病院に子ども2人と母親が運ばれたが、死亡が確認された。

「殺したのは私だろうか」。銃撃戦の極限状態で起きたことを思い出すのは、難しい。何度も考えた。

「子どもの頃は戦士にあこがれ、海兵隊員になりたかった」とマクマス

ターズは言う。自分は映画に出てくるような、何かの信条に従う兵士なのだと考えたこともあった。子どもじみていたと今は思う。

「良い兵士などいない」

「人を獣に変える、それが戦争だ。良い兵士などいない。兵士だった自分が言うのは嫌なのだが、それが現実だ」

「腹が立つのは、収容所に派遣された若い兵士たちを戦争犯罪に追い込んだことだ」とマクマスターズは続ける。「拷問せよ」「イスラム礼拝をさせるな」。米軍では、国際法違反の命令を拒否する権利があるが、実際には難しい。「米国の自由と民主主義、正義を守るため」と入隊した若者たちの中には、命令を実行したことでも心に傷を抱える者も多い。無意識下でトラウマを抱えている者もいる。

決定的だったのは、息子の死だった。海兵隊員になり20代前半でイラク中部ファルージャに派遣された息

子は、パトロール中に自動車爆弾に突っ込まれた。命は取り留めたが、帰国した息子は別人になっていた。軍の勲章も、心的外傷後ストレス障害(PTSD)やうつ病から彼を救うことはできなかった。21年、薬の過剰摂取で息子はこの世を去った。「私が海兵隊員だったから息子も海兵隊に入ったのか」。マクマスターズは自分を責め続けた。

米ブラウン大学が21年に発表した調査結果では、「対テロ戦争」に関わった兵士で、自ら命を絶ったのは3万人余り。戦闘による死者の4倍以上に相当するという。

防諜担当だったマクマスターズが本を出版するには、国防総省の審査が必要だった。書き上げた220ページの原稿を提出してから1年。返却された原稿は、178ページに黒塗りがあり、20ページ分は真っ黒だった。心底腹が立った。

国のために戦った多くの若者が犠牲になり、生き残った者も心身に深い傷を抱えている。だが、戦争を押し進める大統領ら政権トップは、戦争の被害を受けたことがない。軍産複合体や大手ハイテク企業は戦争で金を儲けている。戦争犯罪の責任を

9.11から
四半世紀

元収容者、アムステルダム市長らの尽力でEU市民権を獲得 「政治的正義」求めて沈黙しない

「収容所会議2026」に出席した元収容者でベストセラー作家のモハメド・ウルド・スラヒは、解放された後も渡航の自由がなかった。その苦境から彼を救ったのは国境を越えた支援だった。

グアンタナモの元収容者は解放後も、米国などの加害国が与える障害を乗り越えていかなければならない。モハメドゥを「テロに関係した」と米国に伝えたドイツ、アルカイダの大家として拘束・拷問した米国は、解放された彼が自由と人権を取

問われた者はいない。

「私の本は出版されなければならぬ」。今年2月、フロリダ州の米中央軍本部で、少将やCIA、連邦捜査局（FBI）職員を相手にマクマスターズはまくし立てた。

原稿に脚注をつけて提出し、国防総省が再度、審査することで合意し

た。

「戦争の真実を伝える」

出版をめぐる闘いの一方で、マクマスターズは、退役軍人を通じて元収容者のモハメドゥと知り合い、収容所会議に誘われた。モーリタニア出身のモハメドゥは、アルカイダの

り戻すことに不服のようだ。

モハメドゥの母国モーリタニアの政府は、モハメドゥにパスポートを発給しないことで米政府と合意していたと、米誌『ザ・ニューヨーカー』は報じている。それでも司法の場での闘いで、モハメドゥは解放から1年後に身分証明書を、3年後にパスポートを取り戻した。

だが、完全に自由を得たわけではなかった。龍谷大学の石塚伸一名誉教授が2020年と24年に日本に招待したが、日本政府は査証申請を却下した。理由は明らかにされていない。

重要人物と誤認され、過酷な拷問と独房監禁を生き抜いた。約15年にわたる拘束中に書いた手記は米国でベストセラーになり、映画化され、現在、モハメドゥは平和活動家としても知られる。

モハメドゥは会議場で元収容者たちを紹介した。「心配したが、歓迎さ

れて感動した」とマクマスターズは率直に言う。だが登壇した彼らの経験聞き、その涙を目撃し、罪悪感と悲しみが胸が痛んだという。そして自らのトラウマもよみがえった。「戦争の真実を伝える。逮捕されても、だ。息子が死んだ今、失って怖いものはないのだから」



パスポートを手にする元収容者のモハメドゥ・ウルド・スラヒさん。

渡航の自由を奪われた状況で新たな道を開いたのは、排外主義や移民排斥を主張する右派や極右が支持を拡大していたオランダだった。国を

代表する劇団「NITE」が、モハメドゥを専属作家として招いたのが始まりである。

ドイツの情報に、オランダ政府は躊躇したが、「情報には根拠がない」

とモハメドゥの弁護士が訴えた。政府は21年11月、モハメドゥに就労と居住の許可を出した。

首都アムステルダムに移住したモハメドゥは、アンネ・フランク財団が提供した住居に住んだ。作家活動に加え、人権と自由について学生たちと語ること仕事だった。

24年10月、オランダはパスポート

アムステルダムフェムケ・ハルセマ市長（上）と、
「収容所会議」を企画したプエルトリコ大学のドン・ワリチェック教授。

彼は「自由のための戦い」の象徴だった



を発給し、モハメドゥは欧州連合（EU）市民となった。背景には、アムステルダムフェムケ・ハルセマ市長の強力な支援があった。

「モハメドゥは政治的正義を求めていました。市庁舎で会った市長は、モハメドゥとさまざまな会話を交わした日を振り返った。30歳で米国に拉致され、人生を踏みにじられた。解放されても自由がなく、家族がいるドイツに入学できなかった。『残酷で不当でした』。政治難民とは、自由のための闘いとは何か。『彼は私にとって、そんなテーマの象徴だと感じたのです』」

歴史の歯車に巻き込まれたり、押しつぶされたりした人々に私たちはどう対処できるのか。イスラム教徒や移民、有色人種への憎悪が蔓延する中で、モハメドゥの処遇に留まらない問題でもあった。

劇団の拠点、フローニンゲン市の市長と共に、ハルセマ市長はパスポート発給を政府に働き掛けた。移民に厳格な当時の政権にアピールしたのは「文化的価値」である。著作と映画で世界的に知られた人物が、人権と平和について若者に教えている。「オランダにとってきわめて文化的価値が高い」。移民担当大臣に何度も手紙を書いた。

ドイツの裁判所が、モハメドゥがテロに関わった根拠はないと結論付けた頃から、オランダ政府の姿勢が徐々に変わり始めた。米国がパスポート発給を阻止しようとしていたことは後から知ったという。

24年7月2日に極右主導の新政権が発足した。発給が承認されたのはその直前だった。文化的価値を理由にした承認は、初めてだった。市民権授与式には国王夫妻も訪れ、祝福

した。

「自由をくれたこの国を愛している」。モハメドゥはオランダ語で「自由への長い道のり」と題した本を執筆中だ。

ハルセマ市長は現在、排外主義や権威主義に抵抗し、民主主義の保護を目指す都市の国際ネットワーク「自由都市協定」(Pact of Free Cities)の議長でもある。19年に中欧で設立され、台北など非欧州の都市も加盟する協定に、今年は連邦移民税関捜査局(ICE)に抵抗するミネアポリスなど米国10都市が新たに参加した。加盟都市は50を数える。

「大切なのは、勇気をもって異議を唱えることです」と市長。「大都市は、民主主義や法の支配を求める思想の拠点。私たちは協力し合い、地方自治が活気に満ちていることを示そうとしているのです」

「私たちに責任の一端」

22年に始まった収容者会議は、回を重ねるごとに参加者が増えている。発起人で、プエルトリコ大学のドン・ワリチェック教授は「世界で何が起きているのかを知り、理解するのは簡単ではない。だがグローバルな問題

に私たちは責任の一端を担う。声を上げる必要があるのです」と語る。グアンタナモ収容所での人権侵害が明らかになった当初、「自由と民主主義」を掲げる国々は、日本も含め沈黙した。人権侵害に加担したも同然だった。CIAが策定した拷問プログラムで死者が出たが、政府当局者で責任を問われた者はいない。

教授は、元収容者を就職や手記の出版などで支援している。フランスは元収容者を受け入れた。戦争を後方支援するとは、被害を受けた多くの人生に責任を負うことでもあるのだろう。

英国に住むモアザムは数人の元米兵と共に、収容所の実態を伝えるプロジェクトを続けている。「虐待を指示した政府は許せないが、謝罪する兵士とは友人になれる。我々は人間だから」

「人間性こそが私たちをつなぐ」。サミが解放後に出版した自著『ブリズナー345』にアラビア語で書いてくれた。
(敬称略)

クレジットのない写真撮影／舟越美夏

ふなごし みか・ジャーナリスト。元共同通信記者。